『資本論』第三部28章とマルクスとエンゲルスと大谷氏

大谷氏はエンゲルスが編集した『資本論』第三部 28 章の三点をとりあげ、それらについて、「エンゲルスによるマルクスの理論的諸概念の理解がいかにあいまいなものであったか、ということを端的に示すものである」とか「第 28 章のこれ以下の部分の誤読を誘いだすものだったと言わなければならない」とか、エンゲルスはマルクスの「筋道を突然中断して」、「なんともまのぬけた答えなるものを書いている」とか述べて、「草稿でのマルクスの論旨を見誤らせるものとして、見過ごすことができない最も重要なもの」と言い、「まのぬけた答えなるものを書いている」「この部分でのエンゲルスの手入れが、とりわけ無断でなされたかの問題設定の書き加えが、読者のミスリードを誘う点で、いかに罪深いものであったか、ということを如実に示している」(P94-5)とエンゲルスを断罪しています。

エンゲルスの『資本論』第三部 28 章の編集が、大谷氏が言うように「罪深い」ものなのか、「Ⅰ、第三部 28 章のあらすじ」、「Ⅱ、大谷氏の主張」、「Ⅲ、経済の知識」、「Ⅳ、大谷氏の主張の検証」、「Ⅴ、古典から何を学ぶか」の順に見てみましょう。

Ⅰ、「第三部28章」のあらすじ

トゥックやウイルソンによってなされている(銀行家としての)通貨と資本との区別と流通手段がそのときどきにもつ機能の区別について述べる。

この問題に関するトゥックとキニアの考えを紹介しておこう。(エンゲルスの挿入文)

トゥックはいう――銀行業者の業務は㋐資本を集め、それを分配(移転)することと㋑客の収入を受け入れ消費のために払い出すことであるが㋐が資本の流通であり㋑が通貨の流通である――と。

キニアはいう――貨幣は二つの根本的に違う操作を行うために使用される。㋐資本の移転の手段として㋑収入として、厳密な意味での流通手段として。資本の前貸は銀行やその他の資本所有者の意志だけにかかっている――と。

通貨と資本との区別は次の二つのことに帰着する。

消費者が商品を買う通貨の流通。これは通貨が鋳貨の機能として流通することである。一方、購買手段としてであれ支払手段としてであれ、貨幣が流通を通じて資本の移転を媒介するかぎり、この貨幣は資本の機能で流通する。つまり、区別は貨幣が資本の機能で流通しているかどうかであり、通貨(流通)と資本との区別ではない。

ところがトゥックの見解には次のような問題の混入によって混乱が入ってくる。

①機能上の諸規定の混同

②二つの機能へ流通する貨幣の量に関する混乱

③二つの機能の流通部面の内的な関連による通貨量への複雑な反映による混乱によって、さまざまな種類の混乱がはいってくる。

(ここから、これらの混同と混乱の話に入っていく)

①(機能上の諸規定の混同)について

貨幣は「収入実現」のためであろうと「資本の移転」のためであろうと流通手段として

機能する。だから、「収入の通貨」と「資本の通貨」とを「通貨」と「資本」と区別するのは、まったくの間違えだ。規定性の相違――貨幣が資本として機能するのか、そうでないのかという相違――は、流通手段としての貨幣の性格を少しも変えるものではない。**支払手段としての貨幣と購買手段としての貨幣の区別は、貨幣に属する区別であって貨幣と資本との区別ではない。**

②(二つの機能へ流通する貨幣の量に関する混乱)について

流通する貨幣の総量、通貨の総量は、流通速度、売買・支払の総量、商品の価格総額、決済されるべき支払差額によって規定されている。**貨幣の総量は、購買・支払手段としての貨幣の機能（流通手段としての貨幣の機能）によって規定されており、その貨幣が資本を表しているかどうかは関係ない。**

③について

再生産過程の二つの流通部面(貨幣の収入機能としての流通と資本機能としての流通)には内的な関連があるが､それぞれの流通部面は流通する貨幣の量にさまざまな作用をする。そのことが、トゥクによる通貨と資本とのばかげた区別に新たな材料を与える。

(ここから、③の続きとしてフラートンの見解の話に入っていく)

上記③の続きとして、繁栄期と恐慌期との貨幣流通量の説明とフラートンの見解(命題)について

フラートンがいうように不況期に需要が増えるのではなく、資金需要の充足が繁栄期には容易で不況期に入ってからは困難だということ。つまり、貸付に対する需要の大きさの相違がこの二つの時期(不況期と繁栄期)を特徴づけるのではない。

二つの時期を区別するものは、繁栄期には消費者と商人とのあいだの流通手段に対する需要が優勢であり、反転期には資本家どうしのあいだの流通手段に対する需要が優勢になる。＊『資本論』(大月版④P574)では、拡大再生産のための資本の増強について、資本を外部から調達するのではなく、自分の預金から移転させる場合を想定している。

銀行が行なう前貸の増加に比例して銀行券流通高が減少するのはどのような場合か(『資本論』大月版④P576)

国際収支が逆調で金が必要な場合、銀行から借りた銀行券は決済のために金に変えられて銀行に戻ってくる。この場合、必要とされるのは資本としての資本ではなく、貨幣としての資本である。だから金の流出はフラートンやトゥックがいうような資本の問題ではなく貨幣の問題である。

マルクスは唯一の現実の富である「金」の重要性について述べている。

イングランド銀行の強大な金準備は、つねに、激動期のあとにくる不況沈滞期に形成される。(安い商品の輸出によって、国際収支が順調となるから―青山)

マルクスは「国際流通・支払手段にたいする需要は、国内流通・支払手段にたいする需要とは違う」と言う。しかし、好景気で、国際収支が順調であるならば、貨幣の増加とともに一層の経済規模の拡大をもたらし、国内の一層の流通の拡大をもたらす。(青山)

どうすれば自行の銀行券発行額をふやさずに自分が行う貨幣融通の金額をふやすことができるのか(『資本論』大月版④P580)

還流しなければ流通額(銀行の壁の外にある銀行券の額)を大きくすることになるが、銀行への還流は次の二つの仕方で可能となる。

第一に、有価証券と引き換えに銀行券を支払、最終的に預金として戻ってくる場合。(預金した人は自由に使える。)

第二に、有価証券と引き換えに銀行券を支払、最終的に満期手形の支払という形で戻ってくる場合。

――上記につづく、エンゲルスが差し替えるまえのマルクスの草稿の文章の要約――

銀行にとっては戻ってくるのだから「資本の前貸」とは言えない。支払手段として役立つのである。**ただし、Aにとってのみ資本となりうる。**そして、銀行への返済は「金」だろうが「銀行券」だろうが等価物を支払えばよい。

＊この場合も、銀行にとっては「利子生み資本」という「資本の前貸」である。(青山)

――以下、マルクスの草稿をエンゲルスが差し替えた文章の要約――

「では銀行から A への前貸は、どの程度まで「資本の前貸」で、どの程度まで「単なる支払手段の前貸」なのか？」として下記の三つのケースをあげ、「資本の前貸」と言えるのは①だけだと言う。

①個人信用で、銀行から前貸を受けた場合。(返済するまで自由に使える。)

②有価証券を担保に銀行から前貸を受けた場合。「支払手段」を受け取った。銀行業務の本質的な機能である。

③手形の割引。まったく普通の売買。「資本の前貸」ではない。(手形が融通手形ではなく「資本」形態の手形であるならば「資本」の形態の変化である―青山)

＊いずれの場合も、銀行にとっては「利子生み資本」という「資本の前貸」である。(青山)

＊エンゲルスは、このように、マルクスのいう「A にとってのみ資本となりうる」ケースを説明したものと思われる。ただし、マルクスの記述もエンゲルスの記述も残念ながら、メモの域を出ていないように思われる。――青山

――以下、もう一度マルクスの草稿に戻ってのエンゲルスの編集の要約――

また、個人銀行の場合で、その銀行に還流しない場合は、事実上、イングランド銀行券の前貸であり、その銀行の銀行資本の一部を前貸ししたのである。

＊次に、「銀行の有価証券担保前貸」が増大した場合、「通貨の総量が減少する」と書かれてあるが、理解できない。――青山

銀行が A に対して帳簿信用を開設した場合は銀行は自分の「銀行資本の一部を前貸し」したのである。

「貨幣融通にたいする需要」は銀行業者の立場から見ての資本(「貨幣資本」)であること、有価証券の購入は、「ただそれを買った人にとってだけ、資本なのであって」と、貨幣資本家にとっては「資本」であるが「現実の資本」＝「生産的資本」＝「実物資本」ではないので「ただの債券」である点を述べたあと、「同じような取り引きによって、銀行のものである貨幣が預金に転化し」た場合、「このことは、銀行自身にとっては重要だとはいえ、国内に現存する資本の量を、そして貨幣資本の量をさえも、変えるものではない」ことを述べ、このよな「貨幣資本にたいする需要」による「貨幣資本の欠乏」が「実物資本の欠乏」混同されている。しかし、このような場合、実物資本は市場で供給過剰になっている。

＊このパラグラフの「貨幣融通」とは「収入の貨幣形態」としての「貨幣」の「融通」

を前提としているが、一般に、銀行に入る有価証券が「有価証券担保前貸」であろうと「銀行による有価証券の購入」であろうと、銀行の「貨幣資本」は減少し、有価証券を手放した人がその「貨幣資本」を「現実の資本」に転化するならば「国内に現存する資本の量」は増加するし、消費に使うならば「国内に現存する資本の量」は変わらないといえる。また、銀行資本の欠乏や銀行資本に対する切迫した需要がある場合、現実資本は生産手段や生産物の形で過剰に存在していて市場を圧迫している(『資本論』④ P584)と述べられているが、これは、反転期(「不況期」)の現象を現している。残念ながら、このようにマルクスの草稿は非常にラフなので、十分に読みこなす必要があります。――青山

このように流通手段の総量は不変であるかまたは減少するのに、担保として保有する有価証券の量が増大することの説明ができる。(『資本論』④ P585)(P141) 貨幣融通の要求が非常な勢で押し寄せる場合にも流通を拡大することなしに巨大な額の取引ができるということ、これが貨幣の特性である。(『資本論』④ P586)しかしそのことは、フラートンやトゥックやその他の人々が支払手段として機能する貨幣(銀行券)の通貨(流通手段)は増加も膨張もしないということを証明するものではない。なぜなら、不況期には、購買手段としての銀行券の流通は減少し、支払手段としての銀行券の流通は増加することがありうるし、銀行券の合計は、不変のままでありうるし減少することさえもありうるのだから。

しかし、フラートンやその他の人々は支払手段としての銀行券の流通が恐慌中の、信用が完全に崩壊してしまったときの、貨幣飢饉の時期の特徴だということがわかっていないので(草稿は――示さないで)、このような現象を偶然的なものとして取り扱い、流通のための需要ではなく、蓄蔵のための需要とみる。

支払の連鎖の急激な中断は、それ自身、信用の動揺やそれに伴う諸事情、すなわち市場の供給過剰や商品の減価や生産の中断などの、一部は結果なのであり、一部は原因なのである。(『資本論』④ P587)

しかし、偏狭な銀行業者的観念からフラートンは、購買手段としての貨幣と支払手段としての貨幣との区別を、通貨と資本とのまちがった区別に転化させた(草稿は――転化させていることは全く明白である)。

＊ここで第28章の草稿は終わり、これに続く第29章の最初の四つセンテンスのあとに、要旨次のような第28章に係る文章がでてくる。

恐慌期には、「市場は供給過剰になっており、商品資本であふれている。だから、逼迫の原因になるものは、とにかく商品資本の欠乏ではないのである。この問題にはまたあとで帰ってくるであろう。」(『資本論』④ P588 － 589)

第28章の要旨

貨幣は流通手段、価値表現、資本の循環形態の一局面である貨幣資本、利子生み資本としての貨幣資本という機能をもっているが、トゥックやウイルソンは通貨と資本との区別と流通手段がそのときどきにもつ機能の区別を混乱させて、通貨の機能を㋐資本の流通という機能と㋑通貨の流通という機能とみている。

消費者が商品を買う通貨の流通。これは通貨が鋳貨の機能として流通することである。一方、購買手段としてであれ支払手段としてであれ、貨幣が流通を通じて資本の移転を媒介するかぎり、この貨幣は資本の機能で流通する。つまり、区別は貨幣が資本の機能で流通しているかどうかであり、通貨(流通)と資本との区別ではない。

ところがトゥックの見解には、①機能上の諸規定の混同②二つの機能へ流通する貨幣の量に関する混乱③二つの機能の流通部面の内的な関連による通貨量への複雑な反映によるさまざまな種類の混乱の混入という、三つの混同と混乱がおこなわれている

そしてフラートンも、偏狭な銀行業者的観念から、購買手段としての貨幣と支払手段としての貨幣との区別を、通貨と資本とのまちがった区別に転化させた。

なお、この章で言及した、「このような逼迫の時期に足りないものはなんなのか」という問題には、またあとで帰って論究するが、恐慌期には「市場は供給過剰になっており、商品資本であふれている。だから、逼迫の原因になるものは、とにかく商品資本の欠乏ではない」ことは確かである。

Ⅱ、大谷氏の主張

Ⅰ、大谷氏は、「草稿でのマルクスの論旨を見誤らせるものとして、見過ごすことができない最も重要なもの」として、次の三点をあげ、以下のように述べています。

①『資本論』「第三部 28 章」冒頭のパラグラフを書き換えたこと

②そのあとに、注を加えたこと

③『資本論』(大月版④P581)の「では、銀行からAへの前貸は、どの程度まで資本の前貸とみなされ、どの程度まで単なる支払手段の前貸とみなされるのか？」というセンテンスはエンゲルスの文章であるがマルクスの文章ででもあるかのような誤解をあたえ、マルクスの「同行がなんらかの仕方で資本の前貸したと言うことはできない。同行は銀行券を発行し、それがAにとってはBへの支払手段として、Bにとっては同行への支払手段として役立ったのである。ただAにとってのみ資本{これはここでは、事業に投下される価値額という意味においてである}が問題となるが、それは、彼がのちに自分の還流金を、したがって自分の資本の一部分を、同行に支払わなければならないというかぎりでのことである。…略青山…彼にとっては、この金または銀行券は資本の価値表現なのである」という文章をカットして、三つの例をあげてどのような場合にAへの前貸がAにのとっての貨幣資本の追加となるかを説明していること

①最初のパラグラフの変更について

大谷氏は、エンゲルスが「第三部 28 章」冒頭のパラグラフを書き換えたのは、「エンゲルスによるマルクスの理論的諸概念の理解がいかにあいまいなものであったか、ということを端的に示すものである」(P16)と。

②そのあとに、注を加えたことについて

大谷氏は、エンゲルスが注としてトゥクとキニアの文章を引用したのは、「第 28 章のこれ以下の部分の誤読を誘いだすものだったと言わなければならない」(P21)と述べ、「このあとに続くマルクスの記述を見れば、マルクスがトゥクの区別として問題にしていたのは、……銀行業者の二つの業務にかかわる記述ではなくて、それに先行する、社会的再生産過程における区別なのであった」(P80)と。

③マルクスの文章を削除して新たに文章を加えたことについて

大谷氏は、「マルクスの見地に立てば、『支払手段』は『購買手段』と対比されるべきものであって、『資本』と『支払手段』とを直接に対比することにはほとんど意味をなさ

ないのである」。だから、このような問題を立てていたとはとうてい考えられないと言い(P61)、エンゲルスはマルクスの「筋道を突然中断して」、「なんともまのぬけた答えなるものを書いている」(P63)と。

II、大谷氏は「むすびに代えて」で次のように述べてエンゲルスを断罪している。

「エンゲルスが、〈この「Ｉ)」(第28章部分)でマルクスは、銀行が「前貸」するものが借り手にとってなんであるか、という観点から銀行の前貸を区別しようとしていた、これがこの部分でのマルクスの一つの主要問題だった〉、としていることに、だめ押し的になるが、考証的に反証を挙げておきたい。

マルクスがこの草稿部分で「前貸」という語を使っているすべての箇所を洗いだしてみれば、ここでのマルクスにはそのような問題意識がまったくなかったことが瞭然となる。」(P92)として、「前貸」というワード(単語)がはいっているフレーズを調べ、「それ(前貸ー青山)が前貸の受け手、借り手にとってどのような意味をもっているか、ということに触れている記述が皆無であることがわかるであろう」と述べ、マルクスは「借り手の見地に立って銀行による資本前貸を区別しようという問題意識をまったくもっていなかった」といい、「この部分でのエンゲルスの手入れが、とりわけ無断でなされたかの問題設定の書き加えが、読者のミスリードを誘う点で、いかに罪深いものであったか、ということを如実に示している」(P94-5)と。

Ⅲ、経済の知識

大谷氏の主張を検証する前提としての「経済の知識」について。

第三部28章での表現の未整理な点について

第三部 28 章では、「収入の流通」と「資本の流通」の区別について、次のような三通りの表現がされています。

ｉ、収入の貨幣形態として機能する「収入の流通としての流通」と資本の貨幣形態として機能する「資本の流通としての流通」との区別は通貨(流通)と資本との区別ではない。

ⅱ、支払手段としての貨幣と購買手段(流通手段)としての貨幣の区別は資本と貨幣の区別ではない。

ⅲ、一方にある銀貨や銅貨と他方にある金貨は通貨と資本との区別ではない。

そして、「ｉ」の場合の「通貨」とは流通手段一般としての機能を意味しているのに対して、「ⅱ」と「ⅲ」の場合の「貨幣」と「通貨」は、「流通手段一般としての機能」のうちの「収入の流通としての流通」を意味しているおり、「貨幣」と「通貨」が同じ意味で使われている。

認識を確認しておきたいこと

①「貨幣」について……流通する〝貨幣〟は、それぞれの使用のしかたに従って流通し、その独自の目的を果たす。

㋐「単なる流通手段」としての貨幣

㋑「資本の流通手段」としての貨幣＝「貨幣資本」

㋒「利子生み資本」としての貨幣

正常な再生産過程のなかで必要な貨幣は「貨幣資本」であり、正常な価値実現の遅れか

ら必要とされる貨幣は「単なる流通手段」としての貨幣である。

なお、「通貨説」に関して、「通貨説」に基づく 1844 年のイギリスの銀行立法は、恐慌を激化させた。

「金」→「通貨」→「信用に基づく決済」と決済手段が進むに従って、決済手段(流通手段)の「価値」との同一性が希薄になるが、決済は容易になる。

②銀行の行なう融資について

㋐銀行の行なう融資は、すべて、「利子生み資本」としての貸出である。その「利子率」は需要と供給によって市場で決定される。

㋑銀行の資本は「自己資本」と他人からの借入である「他人資本」からなり、これを原資として「利子生み資本」の貸出を行う。

㋒他人からの借り入れには、「一般の預金」と資本家の「支払準備金の預託」等がある。

㋓銀行の「利子生み資本」は次の四つの用途のために貸し出される。

A「価値を生みだす再生産」以外の目的のための流通手段として

B「価値を生みだす再生産」で、価値実現の遅れによる「資金」不足を資本家が一時的に補うための「つなぎの資金」の流通手段として

C「価値を生みだす再生産」で、資本家が価値実現までの過程で自己の資本だけでは足りない資本、「不足資本」の流通手段として

D「価値を生みだす再生産」を拡大するための資本、「追加資本」の流通手段として

これら四つの用途のうち、CとDが「価値を生みだす再生産」過程での、本来の意味での「貨幣資本」として機能するものであることを、確認しておこう。

これらを踏まえて、大谷氏の主張を検証してみよう。

Ⅳ、大谷氏の主張の検証

最初のパラグラフの変更について

マルクスの草稿とエンゲルスの『資本論』の編集文との相違は、大谷氏が草稿にもとづいて「鋳貨としての流通手段と、貨幣と、貨幣資本と、利子生み資本とのあいだの諸区別」と「流通手段」を「鋳貨」だけに限定したのに対し、エンゲルスは「鋳貨」を省き、「流通手段の諸区分」として、「貨幣」、「貨幣資本」、「利子生み資本」のすべてにかかるように編集したことです。

エンゲルスは、なぜそのように編集したのか。

このパラグラフに続く文章を見ると、「鋳貨の機能」としての流通と「資本の機能」としての流通も、流通(通貨)としては同じ機能であり、支払手段としての貨幣と購買手段としての貨幣の区別は、貨幣に属する区別であって貨幣と資本との区別ではないことを述べています。だから、エンゲルスは、流通手段としての貨幣の使用のしかたによる機能の違いを理解しない通貨学派の混乱に対し、「貨幣」としての流通手段としての〝貨幣〟、「貨幣資本一般」としての流通手段としての〝貨幣〟、「利子生み資本」としての流通手段としての〝貨幣〟を区別することを明確にするために、このような表現を用いたのではないかと、私は推測しています。

だから、大谷氏のように「鋳貨」だけに「流通手段」を限定した、草稿に忠実な、表現

よりも、エンゲルスの編集のほうが明確で分かりやすい文であると思われ、大谷氏の「エンゲルスによるマルクスの理論的諸概念の理解がいかにあいまいなものであったか、ということを端的に示すものである」との指摘は当たりません。そして、「理論的諸概念の理解がいかにあいまいなものであったか」との指摘は、なんの根拠も示されておらず、誹謗とさえ言えるものではないでしょうか。「理論的諸概念の理解」があいまいなため、編集された文章に不都合があるなら、それは非常に重要なことですから、具体的に指摘すべきであり、「理論的諸概念の理解がいかにあいまいなものであったか」などとなんの根拠も示さずに〝あいまいな〟指摘ですますのは無責任ではないでしょうか。

なお、日本版『資本論』(大月版④P581)は、「通貨と資本との区別はトゥックやウィルソンなどによってなされており、そのさい貨幣、貨幣資本一般としての流通手段と利子生み資本としての流通手段との区別がごちゃまぜにされているのであるが、この区別は次の二つのことに帰着する。」と訳しており、最も適切な訳文であるように思われます。

なお、エンゲルスはこのような誹謗を回避するためにも、「貨幣は流通手段、価値表現、資本の循環形態の一局面である貨幣資本、利子生み資本としての貨幣資本という機能をもっているが」等とマルクスのワードを生かして、より正確に編集したほうがよかったのではないかと思われる。

そのあとに、注を加えたことについて

大谷氏は、この注にエンゲルスが注を挿入したことを示す「F-エンゲルス」の表示がなく、注としてトゥクとキニアの文章を引用したのは、「第 28 章のこれ以下の部分の誤読を誘いだすものだったと言わなければならない」(P21)と言います。しかし、「F-エンゲルス」の表示がない点に関しては、注の中で 1894 年版の第 3 部第 1 分冊の 390 ページとの関連が記されている以上、編集上のミスはあるにしても、私のような素人でない、『資本論』の訳者(研究者)にとっては、注がエンゲルスの挿入文であることは明らかなはずで、エンゲルスに「誤読を誘いだす」意図などなかったことは明らかです。同時に、注の内容は、トゥックの捉える「資本の流通」と「通貨の流通」との区別を示し、その延長線上で、キニアが貨幣の「資本の移転が行われるための手段」つまり「貨幣資本」としての機能と「資本ではなく、収入である」「厳密な意味での流通手段」としての「貨幣」の機能との「二つの根本的に違う」機能を述べています。この注に「続くマルクスの記述」を、「第三部 28 章のあらすじ」でご覧いただけばお分かりのとおり、この注にある「資本」と「流通手段」という区分の誤りをあきらかにするのが、注に「続くマルクスの記述」内容であり、決して、「第 28 章のこれ以下の部分の誤読を誘いだす」内容ではありません。

なお、ウイルソンやトゥックなどは、「金」を「資本」とよんでいるが、この「資本」という言葉は、ただ、銀行家的な意味でのみ用いられている。「金の流出は、フラートンやトゥックなどが言うような単なる資本問題ではないのである。そうではなく、それは貨幣の問題である」。(『資本論』大月版④P573－577)も参照して下さい。

マルクスの文章を削除して新たに文章を加えたことについて

大谷氏は、「マルクスの見地に立てば、「資本」と「支払手段」とを直接に対比することにはほとんど意味をなさない」から、このような問題を立てていたとはとうてい考えられないと言い(P61)、エンゲルスはマルクスの「筋道を突然中断して」、「なんともまのぬけた答えなるものを書いている」と言い(P63)ますが、「第三部 28 章のあらすじ」で草稿

にあるマルクスの文章とエンゲルスが差し替えた文章のあらすじを見て下さい。

マルクスはこの貸出がＡにとってもＢにとっても支払手段として役立ったことを述べるとともに、Ａにとってはこの貸出が資本となりうることを述べています。エンゲルスは、これを踏まえて、三つの例をあげて、どのような場合にＡへの前貸がＡにのとっての貨幣資本の追加(「資本の前貸」)となるかを説明しています。だから、これらの文章のまえに、「では、銀行からＡへの前貸は、どの程度まで資本の前貸とみなされ、どの程度まで単なる支払手段の前貸とみなされるのか？」『資本論』(大月版④P581)というセンテンスを置いたものと思われます。そのことをもって、エンゲルスを「まぬけ」扱いするのはいかがなものでしょうか。

ただ、マルクスの文章もエンゲルスの文章も精確さに欠ける文章であることだけは確かだと思います。エンゲルスの挿入した、「第三部 28 章」のあらすじで①と表記した「第一の場合」は、「無条件に新たな資本の前貸を受けた」との前提ならば「資本の前貸」であり「貨幣資本」を手に入れたこととなり、②と表記した「第二の場合」も、担保に入れた有価証券が「準備資本として機能すべき任務をもっていた」との前提ならば「貨幣の前貸」ではあるが「資本の前貸」ではない。そして、マルクスの草稿での銀行からＡへの前貸が、Ａが新たな生産のために手段をＢから購入しその支払のためになされたとしたら、銀行はＡに「利子生み資本」を前貸したわけであるが、Ａは生産のための「貨幣資本」を手に入れたことになる。「Ⅲ、経済の知識」の「認識を確認しておきたいこと」の「②銀行の行なう融資について」を参照して下さい。

なお、エンゲルスは第 26 章(P544～547)でも同様な主張を行っていますが、詳しくはホームページ5-2「大谷禎之介氏と『資本論』」→「その１　大谷氏の主張を検証する」を参照して下さい。

Ⅱ、大谷氏の「むすびに代えて」でのエンゲルスの断罪について

「第三部 28 章のあらすじ」を見ていただければ分かるように、この章の冒頭でマルクスは「貨幣」の流通手段としての機能と「貨幣」が流通する中で「支払手段」と「資本」との異なる機能をもつことを指摘し、貨幣のもつこのような機能を混同してはならないことを述べています。これまで見てきたように、エンゲルスはこのような流れの中で上記「マルクスの文章を削除して新たに文章を加えたことについて」のような編集を行いました。

大谷氏は「前貸」というワード(単語)がはいっているフレーズを調べ、その文の中で「前貸」が「借り手にとってどのような意味をもっているか、ということに触れている記述が皆無である」、だから、マルクスは「借り手の見地に立って銀行による資本前貸を区別しようという問題意識をまったくもっていなかった」と言います。しかし、大谷氏は、まさにエンゲルスが削除し文章の中でマルクスが「借り手にとってどのような意味をもっているか、ということに触れている」ことを忘れてしまったのでしょうか。だからこそ、エンゲルスもマルクスの草稿の削除した部分に「資本の前貸」となるケースを例示したのです。そもそも、銀行の主たる仕事は「利子生み資本」を「前貸」して利益を得ることです。その「前貸」は「支払手段」としての機能と「資本」としての機能をもつことは自明のことです。「前貸」という言葉を使うたびに、その必要のないところで、どうしてその「前貸」が「支払手段」としての機能なのかそれとも「資本」としての機能なのかを説明しなければならないのでしょうか。

この章は、流通する「貨幣」の機能の解明・整理を軸に、流通する「貨幣」の量の解明のための「好況期」と「不況期」の「貨幣融通の要求」の違い等へと話が展開されていきます。その中で「不況期」における「資本家」の「貨幣融通の要求」が「支払手段としての銀行券の流通」であることを述べ、マルクスは、その「前貸」が「支払手段」としての機能なのか「資本」としての機能なのか明確に区別しています。

しかし、残念ながら、この章は、ラフな草稿のため十分な展開・解明・記述がなされていません。だから、「資本家」の「貨幣融通の要求」についても、「好況期」の自己資本を上まわる「投資」のための銀行の「資本の前貸」、生産のための「貨幣資本」の「前貸」など、述べられていません。

このようなラフな草稿から、マルクスの執筆の意図を狭めて詮索し、マルクスは「借り手の見地に立って銀行による資本前貸を区別しようという問題意識をまったくもっていなかった」などといい、「この部分でのエンゲルスの手入れが、とりわけ無断でなされたかの問題設定の書き加えが、読者のミスリードを誘う点で、いかに罪深いものであったか、ということを如実に示している」などとエンゲルスを断罪する。

同時に大谷氏は、「トゥクとフラートンとを批判した第 28 章部分には、さまざまの混同を伴っているトゥクやフラートンの議論から、この重要な区別をつかみだして提示し、それにもとづいて彼らの区別のあいまいさや不十分さや誤謬を批判するという作業が――明示的にではないにしても――含まれていてもよいのではないか、と考えられるのであるが、これまで見てきたように、この部分でのマルクスの記述にはほとんどそのような形跡を見ることができなかった。」とマルクスをも批判しています。

しかし、第 28 章も、序文でエンゲルスが述べているように、エンゲルスの『資本論』編集にあたっての試行錯誤から生まれたものですが、これらの批判は、エンゲルスの『資本論』の編集についての大谷氏の無理解を示すものです。なお、大谷氏は上記のようにマルクスを責めていますが、第 28 章でマルクスとエンゲルスは「通貨と資本との区別と流通手段がそのときどきにもつ機能の区別」をしっかりと述べています。

エンゲルスに、「読者のミスリードを誘う」「罪深い」誤りがあるという大谷氏には、「読者のミスリードを誘う」ようなことはないのか？

第 27 章の〝むすび〟の部分でマルクスとエンゲルスは『資本論』第五篇の編集について、「これまでわれわれは、信用制度の発展――そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な廃止――をおもに産業資本に関連させて考察してきた。以下の諸章では、信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察する」と述べています。しかし、「信用を利子生み資本そのものとの関連のなかで考察」しているのは第 29 章「以下の諸章」で、第 28 章はその橋渡し的な文章の草稿です。だからエンゲルスは第 28 章のタイトルを内容に合わせて「流通手段と資本　トゥックとフラートンとの見解」としました。これに対し大谷氏は、「５．信用。架空資本」の「B 信用制度下の利子生み資本」の「Ⅰ〔トゥクおよびフラートンによる諸概念の混同と誤った区別の批判〕」としています。大谷氏は、最初のパラグラフのあとにエンゲルスが注を加えたことについて、「第 28 章のこれ以下の部分の誤読を誘いだすものだったと言わなければならない」、「このあとに続くマルクスの記述を見れば、マルクスがトゥクの区別として問題にしていたのは、……銀行業者の二つの業務にかかわる記述ではなくて、それに先行する、社会的再生産過程における区別なのであ

った」と言い、「むすびに代えて」での大谷氏のエンゲルスの断罪のなかでも、マルクスは「借り手の見地に立って銀行による資本前貸を区別しようという問題意識をまったくもっていなかった」と言いって、この章が「信用制度下の利子生み資本」を主題としていないことを認めています。第 28 章は「流通手段と資本」の記述であり「信用制度下の利子生み資本」の記述ではありません。それなのに、第 28 章を「B 信用制度下の利子生み資本」の「Ⅰ〔トゥクおよびフラートンによる諸概念の混同と誤った区別の批判〕」としたのは、それによって「誤読を誘いだされるもの」などいないにしても、それこそ、「読者のミスリードを誘う点で、いかに罪深いもの」とは考えなかったのでしょうか。

そして、大谷氏のようなエンゲルスへの中傷が、マルクス経済学の発展にどれほど役立つのでしょうか。

Ⅴ、古典から何を学ぶか

私たちは何のために古典を学ぶのでしょうか。

紙幣は兌換から不換になり、次々と新しい金融商品が開発され、巨大銀行は世界中に支店網を張り巡らせ、金融技術は想像を絶する発展をしてビットコインがインターネット上の貨幣の位置を獲得するまでになろうとする現代、現実資本の世界ではグローバル資本が安い賃金をもとめて「国家と国民」を捨て、先進資本主義諸国の産業の空洞化が深刻化し、政治の危機が発展しつつある現代で、私たちは何のために古典を学ぶのでしょうか。

それには、二つの目的があるのではないかと思います。

一つは、マルクス・エンゲルス・レーニンが発見した〝真理〟をしっかり摑み、自らの思想の中に血肉化して、より豊かになった個人として、自らの行動に生かすということです。

もう一つは、古典の中にある現代につうじるヒントを摑むとともに、古典の中で欠けているもの不十分なものをしっかり摑んで、現代にいきる理論を発展させる糧とすることだと思います。

だから、大谷氏を含む研究者に期待することは、どこがマルクスの文章でどこがエンゲルスの文章かを明らかにすることもたいへん大切なことですが、それらを踏まえて、現在の経済を解明する視点から、マルクスのいっている大切な点やエンゲルスが補足したことで大切な点をしっかりと明らかにし、古典に欠けているところを補い、彼らの業績を発展させることに全力を尽くしていただきたいということです。